令和2年度　第3回安中市 DMO 推進委員会
開催結果報告

報告日：令和3年3月29日（月）
安中市観光課報告

標記委員会を開催しましたため、その結果を以下のとおり報告いたします。

実施日時：令和3年3月26 日（金） 14：30～16：30
実施場所：安中市松井田支所　2 階特別会議室
出席者：別紙出席者一覧のとおり
〈内　容〉 1、開会（司会進行：安中市観光課　吉田観光係長） 2、挨拶 （1）市長挨拶［要旨］ 　委員の皆様の御協力のもと、一般社団法人 安中市観光機構は、この5年間、当市における観光地域づくりのかじ取り役として、国の地方創生推進交付金を活用した DMO 推進事業を当市とともに 5 年間、推進してきた。本日は、これまでの集大成となる今年度の事業成果を皆様と一緒に評価し、議論することで、今後の「DMO としての在り方」を見出していく大変重要な機会となっている。ぜひ皆様方には、忌憚のないご意見をいただきたい。 　安中市観光機構は、最近では「廃線ウォーク」の取り組みがふるさとイベント大賞で「優秀賞」を獲得する活躍も見せている。現在、新型コロナウイルス感染症の影響により、地域経済は大変厳しい状況になっているが、このような状況の中、安中市観光機構が地域の魅力を引き出し、稼ぐ力を引き出してきた DMO 推進事業の経験を活かして、この状況を乗り越えていく先導役としての役割を果たしていくことを期待している。 　事業開始時と現在とでは観光情勢に様々な変化が生じているが、今後の DMO 推進事業を検討するにあたり、委員の皆様からは、事業評価にとどまらず、DMO の持つ可能性や必要な取り組みに関する提案など広く御意見をいただきたい。そして、本委員会がこれからの「DMO の役割」を皆で見出していく機会になれば大変ありがたいと考えている。

(2)顧問挨拶[要旨]

これまで6年間、安中市の観光の在り方や地域づくりの在り方について携わらせていただいた。まだまだ取り組むべき課題があるように思える。最後に、総括として今後の皆様に対するご期待を述べさせていただきたい。

3、議題

(1)令和2年度地方創生推進交付金事業のKPI達成状況の報告

委員会資料を基に、以下のとおり各項目表の説明を行った。

○総務省に提出しているKPIの達成状況の報告[3ページ]

【安中市観光課　大竹課長から説明】

(特記事項)

・観光客数については、開始当時から年々5%増を目標として行ってきた。しかし、現実と目標がかけ離れすぎてしまうということで令和元年度に下方修正を行い、令和元年度と令和2年度の二か年度で5%増という現実を踏まえた目標に置き換えた。

・令和2年度については、令和元年度と同じく新型コロナウイルスの影響で観光客の目標値が大きく下回ってしまっている。令和2年度の実績として、観光客数「144万人」目標のところ、「87万人」という結果になっている。

・DMO会員数は、目標を達成している。

・DMOの雇用者数も、目標を達成している。

○観光庁に提出しているKPIの達成状況の報告[4ページ]

【安中市観光機構　依田氏から説明。以降、16ページまで依田氏が説明。】

(特記事項)

・先ほど大竹観光課長より、総務省へ報告するKPIについて説明いただいたが、私からは観光庁へ報告するKPIを報告する。

・宿泊客数は、コロナウイルスの影響でGW、お盆、年末年始などのいわゆる「特日」の需要について、旅行自粛によるキャンセルが相次いだことで減少し、7万9千人という結果であった。目標値と大幅な差が開いてしまったが、達成率は29.2%であった。

・旅行消費額、来訪者満足度、リピーター率については、毎年、対面アンケート調査を行っており、市内4地点を定点に設定し、その場所にいる観光客に話を伺うアンケートを実施していたが、コロナの影響でWEBアンケートに切り替えた。

・旅行消費額は6,400円を目標にしていたが、17,100円と大幅に目標を上回った。これは、廃線ウォーク参加者もアンケート調査対象にしていたが、廃線ウォークに参加した時点で6,500円の参加費を消費し、また遠方からの方が多いので、その分の交通費や宿泊費が含まれるために消費額が高くなった。一番高い方で55,000円を消費したと

いう方もいた。日帰り客に関しては、近隣、近県の方が多かった。(こうした方々)約100名にアンケートを行った平均値として、旅行消費額17,100円が算出された。

・来訪者満足度は、7点満点評価で、目標は5.25であったが、実績は6.46と目標を上回った。昨年度5.8の評価と比較しても満足度が高くなってきている。これは、廃線ウォークを始めとする体験プログラムに御参加いただいた方にアンケートを回答していただいるという形が非常に多いこともあり、自身で体験したいと思って来た方が満足度、コスコストパフォーマンスが非常に良かったと好評価をいただいたことが満足度の高さに繋がっている。

・リピーター率は、アンケートを行った中でも、初めて安中市に来た方を抜いた二回目以降の方をカウントしているが、94名の方がリピーターであった。

・ボランティアガイドの人数については、廃線ウォークに関して募集していたが、新型コロナウイルスの関係で積極的な募集ができず、結果 62 名と目標達成率56.4%にとどまった。

・体験プログラム数に関してもコロナウイルスの影響で(各事業者と調整や)折衝ができなかったことから、新規のプランを造成するよりは、既存の売れているプランに集中した結果、プログラム件数は61.0%と目標達成には届かなかった。

・メディア掲載回数もイベント実施回数がどうしても少なくなってしまったことで、目標を達成しなかった。

・本日報告した数値は、7月に観光庁の結果報告として報告する。

○観光客数の推移[5ページ]

(特記事項)

・2020年の観光客数は、3 月の集計がまだ出ていないことから、2 月までの数値となっている。

・今年に関しては、4・5 月の緊急事態宣言が解除された後に、愛郷ぐんまプロジェクト、でV字回復していくことになる。それに加えてGoToトラベルキャンペーンのスタート、8月に安中おもてなしキャンペーンの開始により、観光客数が好転し、10月、11月は昨年並みの観光客数まで回復したが、年末年始にかけてGoToトラベルキャンペーンの一時中止や自粛呼びかけがあったことから、一気に1月になって数値が落ち込んでしまった。年末年始の「特日」という人が動きやすいところで営業ができなかったことから数値がかなり落ち込んでしまったが、2月に入ってから復調傾向にはなっている。

・本日から始まる愛郷ぐんまプロジェクト第2弾や今後GW明け頃に再開されるのではないかと思われるGoToキャンペーンにより今後V字回復していくのではないかとイメージしている。

○令和2年度交付金予算内訳及び市への交付金返還予定額について[6ページ]

(特記事項)

・前回の委員会でも報告したが、新型コロナウイルスの影響で実施できなかった事業分の費用は市に返還する。
・返還対象事業は、実施が出来なかったモニターツアー実施費とあんとりっぷ夏号作成費。また、（ビッグデータ契約に際して）割引がきいた効果測定事業と、半額分の不用額が生じた有識者の報償費においても一部を返還する。

○商品開発事業　磯部温泉「恋人の聖地プロジェクト」年間更新費・絹紐追加作成
［7ページ］
（特記事項）
・恋人の聖地に認定された「磯部温泉」内にある赤城神社のモニュメントに碓氷製糸株式会社で作成した赤い「絹紐」を結ぶという仕掛けを昨年度からスタートした。
・昨年度作成した絹ひもの在庫がなくなったため、今年度追加作成を行った。
・恋人の聖地登録更新料と絹紐の追加作成費用をあわせて 28 万円を本事業で活用した。
・恋人の聖地プロジェクトに関する今後の展望として、磯部温泉組合で「Goto商店街」の企画に申請するという形で、恋人の聖地プロジェクトの年間更新費を支払っていくという予定であったとのことだが、新型コロナウイルスの影響によってGoTo 商店街が一時停止になっている。今後のGoTo商店街の再開の様子によって、費用の出どころも変わってくると考えられる。

○商品開発事業　峠の釜めしオリジナル掛け紙作成費・廃線ウォークグッズ作成費
［8ページ］
・廃線ウォーク参加者には、昼食に廃線ウォーク限定の掛け紙と釜の色の「峠の釜めし」を提供しているが、今回、漫画家はやせ淳先生に、この廃線ウォーク限定の釜めしの「掛け紙」イラストを新規で描きおろししてもらった。このイラストは、古き良き信越本線ホーム（横川駅）で釜めしを販売している内容になっている。
・廃線ウォーク参加者に向けて、廃線ウォークオリジナルグッズを販売するために、商品開発のための「デザイン費」に交付金を活用した。
・以上、商品開発事業として、磯部温泉と廃線ウォーク関連で合計108万円を活用して事業を行った。

○物産品カタログ製作事業（物産品EC機能構築事業）［9ページ］
・物産品カタログについて、あんとりっぷHP内に入れ込んでインターネット上で商品を見てもらえるようにデジタル化するとともに、販売の強化を図るためにWEB販売もできるように対応した。前回委員会での報告どおり、既に稼働している。
・これまで他社サービスの WEB 販売機能を利用していたが、販売手数料とカード決済代

行手数料で合計9．8％手数料がかかっていた。それが今回の事業によってカード決済代行手数料の3．2％だけで済むようになった。事業費に 108 万円をかけたが、今後WEB 物販を続けていくにつれて、かけた分の費用が徐々に回収できていくことになる。

・物産販売実績について、別紙「交付金を活用した物産販売売上実績一覧」を用いて説明する。これまで物販は、物産品カタログを作成しての販売、また安中市観光機構の事務所にて対面で販売している。この中で、交付金を使って商品開発をしたものの売上実績をまとめたのが本資料。

・もともとは、交付金活用開始の一年目から商品開発は始まっていて、峠の贈り物カタログの有田屋醤油のお菓子セットなどがこれに該当している。

・今年度の総売上は 467,834円となっている。

・今年度の収益は、マイナス計上（▲84,266 円）となっているが、これは、安中市から再販の要望があった「おかべてつろうポストカード」が要因となっている。再販してからまだ日が経っていないこともあり、その在庫分で現状は収益がマイナスになっている。

・廃線ウォークなどの体験プログラム参加者に向けたグッズ販売は、比較的売り上げは良く、観光消費額を見ても消費単価向上にもつながっていると言える。このため、しっかりと交付金を活用した商品開発は概ね売り上げが上がっていると言える現状がある。現状在庫がある分のポストカードも販売を注力していくことで黒字にしていくことができると考える。

〇安中市・富岡市・軽井沢町を巡るモニターツアー開催事業［10ページ］

・新型コロナウイルスの影響で実施できなかったため、国内、国外のモニターツアーをともに中止している。

〇体験プログラム冊子「あんとりっぷ」制作事業［11ページ］

・夏号は新型コロナウイルスの影響で発行できなかったが、秋号、冬号、春号を作成した。

・前号冬号は、安中市のフォトジェニックなスポットを「女子旅」で巡る内容になっている。（前回委員会の後に発行された。）

・今回作成している春号を含めると、これまで交付金活用事業として、「あんとりっぷ」を19冊発行してきた。

・交付金活用事業としては、今回の春号が最終号になっている。このために、集大成として、安中市全体を網羅できるように、市内 4 エリア（安中、磯部、秋間、松井田・横川）においてボランティアガイドなど、各エリアで活動されている様々な方々に登場していただいて、これまで作成してきた体験プログラムを総集編的に紹介する内容になっている。また、あわせてそこに「春」の要素も紹介する内容になっている。

・各エリアにおいて取り上げる内容として、安中エリアは、ボランティアガイドによる襄城ヒストリート、磯部エリアは松風堂の手焼きせんべいとサクサクウォーク、秋間エリアは秋

間梅林観光協会による梅ジュース体験や商品開発で作った梅のお菓子など、松井田・横川エリアは碓氷関所の保存会による街歩きツアー。

・廃線ウォークについても、最初は参加者から始まってボランティアガイドになっていただいた方などから、メッセージをいただいて、廃線ウォークの魅力と実施内容を伝える内容になっている。

○あんとりっぷポスター印刷事業[12ページ]

・ポスターは２種類作成する。一つは廃線ウォークの年間イベントスケジュールを入れたカレンダーで、現在作成済み。もう一つは、あんとりっぷ春号（冊子）の内容と合わせた内容で、現在作成中。

・あんとりっぷからの予約で見ると、特に「磯部」に関するコンテンツは若年層からの需要が高い。ポスターを作る際には、こうしたトレンドを作っている若年層に刺さるような内容を意識していく必要がある。また、あわせて「SNSの更新」などの若年層に向けた取り組みも必要と考える。

○WEB 保守管理事業[13ページ]

・過去のあんとりっぷ（冊子）内容を見たいという要望があったことから、WEB で見られるようにデジタル化を図った。

・今後、デジタル掲載は「仕組み」としてできているので、あんとりっぷに限らず、各種観光パンフレットを WEB 上で見られるように掲載していくことができる。

○旧信越本線トンネル調査事業[14ページ]

・前回委員会で報告済み。ひび割れなどが数か所見られる結果となっているが、緊急対応が必要というわけでないために、安全に気を付けながら廃線ウォークは引き続き実施している。

○地方創生推進交付金事業　効果測定事業[15ページ]

・観光庁などに報告している宿泊者数の数値を図るなどで活用している。

・「NTT ドコモの基地局データ（ビッグデータ）」と「アンケート」による2つの方法で効果測定を行っている。アンケートは例年対面で行っていたが、今年度は新型コロナウイルスの影響により WEB アンケートにて実施した。

○体験プログラムあんとりっぷの売上実績報告[別紙体験プログラム売り上げ実績]

・今年度は新型コロナウイルスの影響で、特に個別対応の体験プログラムの実施が難しく、実績が乏しかった。

・今後も、廃線ウォークを軸に体験プログラムの造成を行っていきたい。

○第 25 回ふるさとイベント大賞　優秀賞獲得「廃線ウォーク」[16 ページ]

・今月 4 日にオンラインで表彰式が開催されて、廃線ウォークが「第25回ふるさとイベント大賞」の優秀賞を受賞した。

・新型コロナウイルスの影響で体験プログラムも実施できない中、WEB上で廃線ウォークが体験できるVR映像を流していたり、ホームページなどで随時情報を発信していたりしたことが評価された。

○来年度事業予算[17ページ]

【安中市観光課　大竹課長から説明】

・これまで、DMO推進事業は、地方創生推進交付金を活用して、国と市で各693万2千円の計 1,386 万 4 千円を安中市観光機構に補助してきた。今年で交付金が終わりになるので、旧観光協会分で650万円、磯部簗関係で50万円、新規事業分で 150万円分のトータル 850 万円を DMO 事業のための予算として安中市観光機構に活用していただく予定。

・また、安中市観光機構補助金として、人件費や社会保険関係、光熱水費などの費用としてトータル 1,100万円補助予定。

・2つの補助金を合わせて、合計 1,950 万円を来年度安中市観光機構に補助予定。

4、質疑応答

①安中市観光機構における来年度事業の実施内容に関する質問

【(公社)安中市青年会議所　佐俣氏】

○来年度予算の「③新規事業」について具体的な案は決まっているのか。

【安中市観光機構　萩原事務局長　回答】

・事務局案は持っているが、理事会での議決前であるので、案ということを踏まえながら説明する。

・この 5 年間、地方創生推進交付金を活用して、商品開発や体験プログラムの造成を、地域の方々や行政と連携しながら実施してきた内容や培ってきた経験などを活かして今後の事業に取り組んでいきたい。

・推進交付金を活用した最初の2年間で集中的に地域の事業者や地元の方に参加していただき、地域の宝物などや良いところなどを提案し合うワークショップを実施した。このワークショップで出た意見をもとに体験プログラムの造成などにつなげる、またDMO推進のために取り入れた。ここ 3 年ほどこのワークショップが途絶えているので、またワークショップを実施していきたい。

・また、四季の観光スポットの映像の撮影などを行っていきたいと考えているが、この内

容についてワークショップの中で意見をいただきながら、それを反映して作成していきたい。
・この撮影に基づいた観光パンフレットも作成していきたい。
・あわせて SNS での訴求も行っていきたい。
・作った動画や画像などは、郷土学習のための教材として、学校の授業としても使っていきたい。また、外に出られないお年寄りなどにも見ていただきたい。
・これらの事業を市と連携して実施していきたいと考えている。

②廃線ウォークに参加するお客様のリピーター率や来訪される地域に関する質問
【安中市観光ボランティアガイドの会　吉村会長】
〇全体の話の中で、「廃線ウォーク」に関する割合が大きいが、将来的にどうなるかに興味がある。どれくらいリピーターのお客様がいるのか、どこの地域から来られるお客様が多いかなどを聞きたい。

【安中市観光機構　上原氏　回答】
・4 月で約 3,000 名の参加者がいたが、リピーターは 1,000 名以上いた。
ただし、（実施開始からあまり年月が経っていないこともあり、）今リピートして来てくれる方は、廃線ウォーク実施初年度に来てくれた方や一年越しに参加していただいた方々など。
・コースで登り、下りなどバリエーションがあるので、リピートしてもらいやすい。
・信号の点灯を行うなど最初の頃はやっていなかった取り組みを行ったり、お客様の顔を覚えるように努めて一度来ていたお客様には前回と違う内容の説明をする、新しく仕入れた情報をなるべくお伝えしたりなど工夫している。これからも新規のお客様がリピートしてくれるように努めていきたい。
・参加者の 7 割以上が県外の方となっている。このうち 6 割が関東圏内であるが、大阪や九州など遠方から一人で来られる方もいる。
・新型コロナウイルスの影響で県内のお客様も増えている。
・先週の土日に開催した時には、参加者のうち関東圏内の方が 6 割、その他県外の方が 2 割、県内の方が 2 割であった。安中市の方の参加も増えている。
・交通の便の関係から東北からの参加は少ない。

③DMO の自走率の目標に関する質問
【富岡市観光交流課　片山係長様】
・富岡市では、今年度に富岡市観光協会の方でDMOの申請を提出したことで、DMO を自走に向けて走らせたところである。しかし、市全体の広域的PRやマーケティングを含めて100％自走で行うのは難しいと感じている。DMO の申請を出す際に、補助金あり

きのDMOはありえないとは考えるところであるが、しかし、活用できるものであれば使った方が良いとも考えている。これらを踏まえて、安中市とするとDMOの自走率をどこまでの目標にしているのか伺いたい。

【安中市観光課　吉田観光係長　回答】

・5年間、（地方創生推進交付金を活用して）安中市観光機構が収益目標を立てて事業を行い、その収益を基にして自立していくというのが計画であった。

・このため、質問の回答である「目標」については、「稼ぐ力を身につける」ことである。

・収益目標を達成した状況で 6 年目を迎えたかったところであったが、現状は、そこまでの収益がない。このため、先ほど来年度予算について説明したが、安中市から補助金を支出して、安中市観光機構の人件費等を見ることになっている。

・具体的な目標金額は決まっていないが、市の方で補助金を出しながら、安中市観光機構と一緒になって、「稼ぐ力」をもっと身につけていくよう取り組みを進めていきたい。

④事務局から群馬県観光物産国際協会への質問

【安中市観光課　吉田係長】

〇県内市町村のDMOに関する情報があれば教えていただきたい。

【群馬県観光物産国際協会　須藤専務理事　回答】

・県内で8つの地域DMOがある。当方、群馬県観光物産国際協会は県域DMO。

・なかなか支援が受けらなくて、経営が苦しいという DMO もあると聞いているが、その中にあって、安中市の DMO は廃線ウォークというようなメインのコンテンツもあり、比較的うまくいっているという印象を持っている。

⑤地方創生推進交付金活用分の金額の来年度以降の補填方法や DMO 設立の理由及び DMO に求める役割等に関する質問

【群馬県観光物産国際協会　須藤専務理事】

〇これまで活用してきた国からの交付金が来年度からなくなるとのことで、これまで行ってきた廃線ウォークのオリジナルグッズの作成やWEB保守管理などは来年度以降どうするのか、また交付金分1300万円分をどのように補っていくのかをお聞きしたい。また、当方も県域 DMO として活動している中で、DMOは稼ぐと言われてきているが、本当に稼げるのだろうか、というのを考えている。この中で、安中市として、何のためにDMOを作ったのか、DMOに何を求めるのか、現在どうなっているのかをお聞きしたい。

【安中市観光機構　萩原事務局長　回答】

・交付金がなくなった分をどう補っていくかについては、これまで推進交付金を活用してきた事業と同様のやり方はできないために、費用をあまりかけない方法で、安中市観光機構の収益の中から回して事業を展開していきたい。また、（安中市から補助金支出される）旧観光協会分の事業に関する補助金の有効活用をしていきたい。

【安中市観光課　大竹課長　回答】

・交付金は、安中市観光機構がこれまで地域の活力を生み出すために、体験プログラムを試行錯誤して造成するという経験を積み重ねるために活用いただき、この中で、廃線ウォークというヒット商品が生まれた。

今後は、地域の活力として、お土産屋や、飲食店などのあらゆる分野について、安中市に行けばこんな魅力がある発信ができるように、という横のつながりを持たせること、物産振興に関する事業に着目するなど、着眼点を変えていっていただきたいと考える。

安中市観光機構でワークショップを行うといっていたが、地域をもう一度見直していただくことに費用をかけて、稼げる観光の事業づくりを見出してもらうことを市では期待している。

【群馬県観光物産国際協会　須藤専務理事　回答後の意見】

・国の方ではDMOに対する期待は大きいと感じているが、私は２年間群馬県観光物産国際協会にいるが、この中で、「DMO は自立できるのか」ということに関して、これまでの経験の中で厳しいものを感じている。観光振興とは何かを考えると、公益的なものがあり、現状 DMO は、本来行政がするべき部分の一部を担って、「住んでよし、訪れてよし」の地域づくりを行う推進役としての役割を担っているのではないか。どこの自治体の行財政が厳しい中、DMO が自立できればベストだが、どこまでなら行政が支援できるのかという線引きや一定のルールを決めておくこと、また、（DMO を必要とする）目的をはっきりさせておくことが大事と考えている。

⑥中山道の活用に関する意見

【安中市観光ボランティアガイドの会　吉村会長】

〇中山道は安中市の宝だと言われている。我々の団体は、6年間、この中山道の様々なガイドコースづくりに関わってきたが、今回の予算を見ていると、「中山道」に関する取り組みが見えてこない。例えば、中山道沿いに様々な飲食店などがあり、そういったところと連携してもらうなどの取り組みなどでもかまわない（ので、中山道に関する取り組みを考えていただきたい。）。

また、今（大河ドラマの関係で）脚光を浴びる深谷市と「中山道」を通じたつながりがあるので、安中市と深谷市とが連携した深谷市とめがね橋を案内するガイドコースを作

ることも非常に魅力的と考える。さらに中山道は、軽井沢やさらにその先まで伸びており、（各観光地とのつながりを持ち、様々な観光振興の取り組みを生み出せる可能性があることから）様々な施策の中で、「中山道」をもっと取り上げていただきたいと考えている。

更に、以前に、市長との懇談会を行った時に、市は観光案内看板が少なく、観光振興のために看板設置が有効的という話を差し上げたこともある。今回看板に関して観光課から様々な提案が出ていたが、看板を含めて中山道の活用をもっと考えられないかと思うがいかがか。

【安中市観光機構　吉田観光係長】

・市としては、中山道沿いにベンチを置くという「中山道おもてなし事業」を継続して行っている。令和3年度も引き続き実施。また、明日鉄道文化むらで中山道おもてなし事業（イベント）を実施する。詳細は、防災メールで発信しているので、御覧いただきたい。

・深谷市が全国から注目されているという話も出たが、安中市は大河ドラマ「青天を衝け」の関係でつながりがあり、また、シルク関係やねぎサミットで深谷市と親交がある。このため、深谷市との連携については今後検討していきたい。

・当市と松井田商店街は、全国中山道協議会に加盟している。本年度、安中市の方で全国大会を行う予定であったが、新型コロナウイルスの関係で、まだ安中市で行うかどうかが決議されていない状態である。これから動き始めたら、ボランティアガイドの会にも協力いただいて、安中市で全国中山道協議会を開催して、来訪した中山道の各宿場町と協力しながら、中山道の魅力の発信を行っていきたい。

・看板について、安中市観光機構の来年度事業の中の「新規事業費」がまだ具体的な使い道が決まっていないことから、看板が必要であれば、この新規事業費から看板を設置していく費用を充てていきたい。このあたりは、安中市観光機構と安中市とで協議しながら、必要なものから整備していくこととしたい。

5、報告事項

①安中市観光課　吉田観光係長報告

・今日の報告の中で紹介した地域活性化センターのふるさとイベント大賞について、過去遠足マラソンも入賞している。本日、安中市青年会議所の方も出席いただいているが、「安中祭り」を応募してみてはいかがか。応募は、当市を経由してエントリーいただくことになるので、御検討いただきたい（要望があれば当市への御連絡をいただきたい）。また、他にふるさとイベント大賞にふさわしいイベント等あれば市として応募していきたいと考えている。

・明日鉄道文化むらで「中山道おもてなし事業」を実施する。当該事業は、開始してから今年で 5 年目になるが、イベントとしての実施は 4 年目になる。内容は、世界的に有名なチ

ェーンソービルダーを招いて、像の製作実演をしていただくもの。松井田支所入口にある木彫りの「こうめちゃん」の像はこの方が製作した。明日は、現在鉄道文化むらで行っているクラウドファンディングの対象「アプトくん（機関車）」の像を製作していただく。ぜひお時間ある方がいればお越しいただきたい。

②安中市観光機構　上原氏報告

・本日の会議開始前に本会場で動画を放映していたが、この動画は、観光庁の支援事業で作成した「碓氷峠の歴史に携わった人たち」のドキュメンタリー動画である。3 名の方に4つの質問をしており、その質問を通じて、碓氷線の思いを伝えていただき、また今後碓氷峠に来る方にどのようなメッセージを伝えていただきたいかを伺った。全体で 30 分程度の動画となっている。

・この動画の上映会を 3 月 28 日に鉄道文化むらで行う（参加者を募集して開催）。
また、その前日 27 日には、インタビュー協力者とその家族などの関係者向けの上映会を開催する。

・安中市観光機構の観光コンテンツである「廃線ウォーク」の中で、トンネルの中で信越本線新線に関する自作の動画をこれまで参加者に御覧いただいていた。より良いコンテンツを参加者に提供したいことから、このドキュメンタリー動画を 6 分程度にまとめたショートムービーを放映するようにしている。

・また、（フルサイズの動画についても）定期的に上映会を行っていきたいと考えている。

・鉄道文化むらでは、今年 5 月 15 日（土）に夜行 SL の運行に合わせて、夜間開園を行う「横川ナイトパーク」というイベントを開催する。観光機構は、このイベント内で本動画の上映会に携わらせていただく予定。

・本動画は碓氷峠に焦点を当てて作成したものであるが、今後は別のスポットやコンテンツも取り上げた動画を製作していきたい。

6、有識者総評［要旨］

【清水顧問】

・地方創生推進交付金活用に際して内閣府の総務省に、DMO 登録に際して観光庁にそれぞれに出した KPI について報告があったが、どうしてもコロナ禍で観光客数や宿泊者数は減らざるを得ないと思うが、他の要素（KPI）については、取り組みを評価できる。

・内閣府の KPI を見ると、様々な事業実施を通して、「3 名の雇用」を生んだことを達成している。これは、「地域への働きかけ」を創るという地方創生の目的を十分達している。

・観光庁の KPI について述べると、観光庁が最も関心を持っているのが、観光客数でなく、「（一人当たりの）消費額」。観光客が少なくなっても消費額が上がれば、トータルで地域の稼ぎが増えることになる。このため、消費額が目標値を大きく上回っていることは非常に熱心に取り組みを行ったと評価できる。

・消費額の向上については、単に旅館だけでなく、商店街や農家などにもお金が落ちるようになればなお良い。
・リピーター率についても評価できる。今後人口はますます減っていく流れであり、頭数は増えない。このため、観光客に何回も来てもらうことが大事になってくる。このためには、来訪者の満足度が高くなる必要がある。こういった内容が年々良化してきており、様々な工夫を凝らしてきたことが見える。これらを踏まえて、DMOの基本であり指標については、非常に頑張っていると評価できる。
・また、リピーター率が高く、来訪者満足度も高い地域は、住民が活き活きとする、また住民の活動が活発になる。こうした地域は、もっとお金を使いたいと来訪者が思う地域であり、またインバウンドに頼らなくても強い地域である。
・リピーター率や来訪者満足度を疎かにしていた取り組み、例えば、インバウンド対策として高い費用をかけてタレントを起用してとにかく大勢に来てもらうようにするため（だけ）に誘客宣伝を行うなどは、一時的な観光誘客のための施策で効果がない。
こうした浮ついた施策に頼らず、着実に取り組みを行っているところもDMOとして評価ができるところである。
・今年度で交付金も終わり、安中市観光機構は独り立ちしていくことになる。この中で、本日「DMO は自走しなければならないのか、稼がなければいけないのか」という話があったがこれには誤解がある。一方で、「公益的な要素があるから、稼がなくてもいい」という話もよく出てくる話だが、これも誤解である。
・補助金を活用しようと、自前の資金を使用しようと、成果出して、それをチェックすることが「DMO」の基本。前身の観光協会や全国の観光協会にあるような、「補助金を受け取って、全額使いました。」という取り組みではだめ。成果を出しましょう、出した成果をきちんとチェックしようというのが、DMOの基本として求められること。（また、これまでの観光協会の取り組みの反省である。）
・住民が活き活きして、「何かやろう」という意識を持とうとなっているかが大事。「住んでよし、訪れてよし」という言葉があるが、住民が自身の地域に誇りを持っている地域になっているかが一つの成果指標となる。
・先進的な DMO は、観光客の満足度だけでなく、観光客が来ていて住民が喜んでいるかという住民の満足度も調べている。京都みたいに観光客はもう満員で、住民が観光客に不満がたまってきているという場所があちこち散見してきており、観光に関する軋轢が生まれている。このために、「住民」が活き活きしているかが指標になる。
・また、観光客が地域でどれほどお金を使ったのかという「消費額」に関する指標は大切。このことについて、観光客は DMO に（直接的に）お金を使わなくても良い。DMOでなくても、地域の農家や商店街、モノづくりの方などにお金を使ってくれたら、DMO として稼いだことになる。このため、DMO自体がいくら稼いだか、いくら稼ぐかにこだわるのはまったくの誤解。地域が潤っていくための成果をチェックしていこうというのが KPI である。

・今年 2 月に7つの DMO が観光庁から認定を取り消された。これは、DMO が成果の確認をしていなかったためである。予算を使って事業だけ行ったというだけではだめ。

・これらを踏まえると、今後の課題ははっきりしている。一つは、オール安中の力を結集させる必要がある。DMO に様々な人々が関わるようになってきており、この委員会も青年会議所や県の観光物産国際協会、ボランティアガイドの会など多様な人々が集まっている。しかし、もっと多様な人々が関わるようになることが必要。さらに、単に大勢が集まって意見するだけでなく、様々な知恵を出し合って、それを自らが実行する、担っていく必要がある。

・しばらく前は、ワーキンググループをやりながら、皆で知恵を出し合い、実践していこうという動きもあったが、今はこういったものが足りない。

DMO 推進委員会は今回を持って終わりで良いと思う。また、各団体の長などが集まる会合は年に 1 度で良いと考える。

・皆で知恵を出し合って、皆で実行する人たちのためのワーキンググループが必要と考える。

・今一番取り組みが熱心な DMO は八ヶ岳にある DMO であると思うが、各団体の長など集まる会議は、年に一度だけである。あとは、旅館の若手、青年会議所の若手、ボランティアガイドの会、生活の会、山のガイド、ペンション経営者、農家、モノづくりの方などが数十人集まって、わいわいこうしていこうという実行に向けた提案を出し合っている。こうした取り組みの方がお金もかからないし、（現実的にできることを考えているので、）お金をかけようとも思わなくなる。

・長野県の飯山市では、こうしたわいわいと意見し合う会の中で、「トレッキングルート」が欲しいと意見が出たが、住民と一緒になって、お客様にボランティアでトレッキングルートを作ってもらうという取り組みを行い、作りあげた。

また、千曲川の西方に桜並木を作るのに、市に言っても予算がないということで、みんなで、一人一本ずつ、さらにお客様にも協力いただいて、桜並木を作った。こうした皆で知恵を出し合う打ち合わせを行う場が大事。安中市観光機構には DMO としてこうした場を是非作っていただきたい。また、ここには市役所も一市民として参加していただきたい。

・鉄道文化むらで行った「鬼滅の刃コラボイベント」について安中市の職員アンケートを行ったときにも市役所職員から様々な知恵、面白い発想が出てきた。その中の一部が鉄道文化むらの活動の中に反映された。

・このように、オール安中の力を結集して、皆でわいわいがやがや集まって、知恵を出し合って、皆で実施していくということが大切であるので、こうした取り組みを是非お願いしたい。

・さらに、それをどのようにお金を稼ぐことに、一人当たりの消費単価を上げることにつなげていくかを考えることが大事。そこにはさらに知恵が必要になるために、専門家のアドバイスや DMO の事務局の方々の知恵の出しどころである。

・事業として、映画（動画）を作りました、流しますだけではあまり効果がない。それをどういう場で、誰に見せるかを考えることで、お金を稼ぐことにつながっていく。

・色んな知恵がお金を落としてもらうためには必要。現状の取り組みのあんとりっぷ、廃線ウ

ォークに関してもまだまだやるべきことはある。

・廃線ウォークも 3,000 名が来場したので完成した、というわけではないと思う。まだまだ楽しい仕掛けを考えていく必要がある。宿泊を増やすために朝一番、または夜間に廃線ウォークを実施する、また鉄道文化むらや峠の湯と連携した廃線ウォークを行う、などを廃線ウォークの企画の中で考えていくことで、両方が儲かっていくことになる。ぜひ活発に意見を話し合っていただきたい。

・オール安中で知恵を結集する、その知恵をどのように経済に変えていくかを議論していくことが大切である。このため、来年度以降の会議の在り方について、これらを踏まえてどうするかを検討いただきたい。

・お金の関係について申し上げると、私は、補助金はこれ以上増えないと思う。逆にいえば、先ほど申し上げた通り、どうやって知恵を結集していくのかを考えなければならない。

・海外におけるDMOについても、自立が求められる中で補助金自体は投入されている。ただし、成果はしっかりと報告させている。年度末になって約束した目標が達成できないとDMOの幹部は自動的に退職になる仕組みであり、緊張感をもって取り組んでいる。それほど、補助金という税金を使うことに緊張感がある。このため、海外では補助金は不要という DMO があちこちにいると聞く。

・この辺を考えていくと、DMOは自分で財源を探してくるという動きが生まれてくる。
稼ぐところを作って、財源を見つけてこないと、本日話のあった解説看板や標識、関所の修繕などやるべきことにお金が回せないということになる。また、鉄道文化むらの財産、アプトの道、めがね橋、旧丸山変電所の維持管理についても、財源を作らないと税金では賄いきれない状況になると考える。こういったことも含めて新たな財源を考えていく必要がある。

・重要文化財の維持には費用がかかる。それを負担していただくために、アプトの道などは有料すべきと考えている。また、クラウドファンディングや寄付などを集めていくことも必要。このようにどうやって新たな財源を稼いでいくかを議論していくことが重要。

・峠の湯もしっかり「稼ぐ」ためには、鉄道文化むらとくっつけるのではなく、DMO にくっついた方が良いのではないかと考えている。

・稼ぐためには知恵を出す必要がある。このため、今後の議論をぜひお願いしたい。

7、挨拶

【安中市 DMO 推進委員会　武井理事長】

・なぜ DMO に取り組んだのかについて振り返ってみる。まず安中市観光機構を立ち上げたことについては、事業を受託していく団体としては、しっかりとした法人格をもった組織である必要があると考えたためであった。また、実施する中では、「地域のため、地域活性化のために」活動するという、いわば「行政の役割」の部分を担うことのが難しいと感じた。

・国の交付金を活用して実施していくことと行政を話し合って決まったが、当時のあった観光協会は、磯部簗の運営や、磯部温泉会館の管理など、観光事業に対して積極的な取り

組みを行っていなかったように感じた。また国の交付金を活用するにあたって、お金の管理がしっかりしている必要があると感じた。こうした状況で安中市観光機構を立ち上げようと考えた。

・DMO は、自立をするために事業費を自分で稼ぐということが大事と考えていた。このために、自分たちでやるべきことはやろうということで、廃線ウォークが提案されて、実施を始めた。

・市からの事業請負の側面もあって稼ぐための事業を行った。この中で、観光機構だけではなく、市や安中市商工会、秋間梅林観光協会、鉄道文化むら、など様々な組織では何ができるか、地域の観光資源をブラッシュアップすることによって観光客誘客を図る取り組みも行った。

・ゼロから始めるものであるので、何をやっても失敗ではない。失敗ではなく、また出てきた課題に向かって取り組んでいけばよいという考えのもとやってきた。

・群馬県でも安中市が DMO の認定を受けたのは初めてということで、外から視察に来ていただいた。

・どんな事業も軌道に乗るのに 10 年かかる。この中で、自立できるほどの稼ぎにはまだなっていない。

・コロナの関係で一番大変なのは、各事業者である。国がそこに対して、様々な補助金を出している。各事業者にて、売り上げが落ちてしまった、運転資金がなくなってしまった、廃業しなければならないという状況が起きている。観光機構も誕生して 5 年になるが、このような体力、財政力的に困難が生じるような状況は想定できなかった。しかし、今までやってきた経験を活かしながら今後の事業に取り組んでいきたい。

・行政は行政として非常に難しい立場であるが、観光事業をやっていくためには投資も行っていただく必要もある。本日当組織の上原も申し上げたが、リピーター確保のために、新しいものを常に入れていかなければならない、話も新しい情報を入れていかなければならない、設備もちょっとずつ新しくしていかなければならない。このように、投資をしながら、新たな観光事業を今後もやっていかなければならない。このためには、観光機構として DMO の在り方、DMO の原点を振り返って、見直していかなければならない。

・安中市と民間である我々とが一体となって、地域の活性化のために市民の役に立っていく、そうした取り組みを行わなわなければならない。

・本日お話しいただいた皆様、地域の一人ひとり、それぞれの組織がそれぞれの役割を果たしていくことで、（例えば、秋間梅林は農泊で、磯部温泉は宝探し事業など）それらが地域の中でかみ合っていくことで大きな力になっていくと思う。

・私は今月 31 日に聖火ランナーとして走ることになった。このときに、「温泉マーク発祥の地」という横断幕を作ったので、それを沿道でもって群馬テレビに取り上げてもらう。また、この映像をどこかの場面で活用していこうと考えている。

・安中総合学園の高校生が秋間の梅を使ったスイーツ作りを開発しているが、しかし、これ

を作る工場は市外である。このため、市内の工場で作れるような起業が行えれば安中市の役に立てると考えている。

・行政は予算だてが必要であるが、それをしているとチャンスを逃してしまうということもある。大河ドラマ「八重の桜」の時には、放送中には大勢の観光客が来ていたが、トイレがなく観光客が困っていた。このトイレは、結局観光客がいなくなったあとに作られたということもある。こうしたチャンスを我々が活用して地域の役に立っていきたい。

・DMO が地域の皆様と行政と一体になって、このまちを盛り上げ、そこに観光客が来てもらえる。また、インバウンドにつなげていく取り組みができればと考えている。またその中で、地域の皆様が安中を知る、安中で楽しくいられる取り組みにつなげていければよいと考えている。

8、閉会